

手話を通して私ができること

森 香裕

みなさんに今聞こえている音とはどんな音ですか。耳を澄まして聞こえてくる音は何ですか。音が聞こえることは幸せだと思いませんか。私は、どんなに嫌なことを言われても、幸せなことだと思えます。世界中には、音を感じ取ることができない人がたくさんいます。それは、聴覚障害者と呼ばれます。私の近くにも、音を感じ取ることができない人がいます。私の両親です。小さい頃の私は、手話ができることが自慢で「すごい」と言われれば、とても喜んでいました。私にとっての手話は、日本語を覚えるのと同時に覚えたようなもので、「すごい」とかではなく、できて当たり前なのです。当たり前の手話でも、家から一歩出れば周りの目が気になることがあります。外出中の母との何気ない会話は、もちろん手話。しかし、周りからの冷たい視線。外見上では、全く判断のできない聴覚障害者、何年たっても聞こえない人がいる環境は、認めてもらえていないのかと考えてしまうこともあります。

先日、母とデパートへ買い物に行った時、手話バッチを付けている店員さんがいました。耳が不自由な人たちの買い物がしやすくなっている状況になんだかうれしくなり、以前より社会全体が障害者に対して理解を深めようとする行動が多くなったように感じました。

藤岡北高校に入学してから仲良くなった友達に、両親が聴覚障害者だと伝えたとき、内心「嫌われるのではないかとドキドキしていました。しかし、友達は「私も手話をやってみたいんだよね」と言ってくれ、なぜだかとても嬉しくなり、自分のことを少しでも理解してもらえた喜びは、今まで詰まっていた心が開けたように感じました。聴覚障害者にとって、手話をする、知ってもらうことが、大きな救いになるのです。

みなさんも、1つ手話を覚えてみませんか？人にとって大切なコミュニケーション、あいさつの『こんにちは』などは、どんなときにでも使えます。一緒にやってみて下さい。人差し指を向き合って曲げます。『こんにちは』今、手話をやってみて特別なもの難しいものだと思いませんか。実は、手話は言語なのです。2006年12月に国連の総会で手話は音声言語と同等の言語として定義され、手話＝言語が国際的に認知されました。しかし、日本は憲法や法律ではまだ認められていない国であり、聴覚障害者は地域や仕事、家庭や教育などまだまだ、様々な壁があるように思えます。

みなさんの身近なところで手話の講座などを実施している団体や場所はありますか。私の母は、聴覚障害者団体に勤務しながら、障害者の理解を深めてもらう活動を行っています。

す。母の仕事の付き添いで聴覚障害者のデイサービスへ出かけた時、手伝いに行ったはずなのに何もできない自分がいました。話しかける勇気や積極性に欠け、得意な手話は使えませんでした。こんな自分ではいけないと思い2回目に行ったとき、隣に座ったお年寄りに工作を作る手順を手話で伝えました。「手話できるんだね。」と初めてコミュニケーションが取れたことに喜びを感じました。そして、私に「手話うまいのね。手話通訳士になるの？」と聞いてきたのです。そのときの私は通訳士になる気なんてなかったのです。母は「せっかく手話を覚えているのだから、社会で役立つ人になって欲しい。手話ができる警察官、医者、手話ができるホームヘルパー。」と私の将来について初めてアドバイスをしてくれました。このことがきっかけで、自分の将来について考えました。

高校生活で取れたての野菜のおいしさや花の色の美しさなど、栽培の楽しさや喜びを農業科目で身に付けます。また、介護実習を通してホームヘルパー2級を取得し、人々の心身の健康を推進することができる園芸セラピーを学ぶことが、これからの自分を作っていくのだと思います。そして、将来は聾啞者の施設で野菜や草花栽培について手話で交流ができ、農業の魅力を伝えられる、園芸と福祉を両立した手話通訳士になることが目標です。今の私にできることは、クラスの人や身近な人に手話を広める活動です。手話を知ってもらうことが聴覚障害者の喜びになり、社会全体の理解に繋がる第一歩であると思います。

生まれつき与えられた運命だけれども、後悔なんてしてない両親を私は尊敬します。嫌なことがあると両親にあたる自分を後悔することもありました。そんな私も今までやってきた手話を活かし、ボランティア活動を深め、聴覚障害者との架け橋になる手話通訳士を目指します。そして、聴覚障害者が地域で明るく暮らせる良い社会になるように、これからも手話という言葉を広める活動を行いたいです。